

秘 仏

医 王 薬 師 尊
秘 仏 未 公 開
靈 視 瑠 璃 光
魂 燦 燦 徘徊

子 蒸 に
餌 と あ た ふ る 視 蒸
親 子 も ろ と も 鶯 の 餌 か も

厚 木 市 荒 井 一 雄

大 医 王 仏 ・ 薬 師 瑠 璃 光 如 来 ！
秘 仏 な る が 故 に 未 だ 公 開 さ れ ず ！
瑠 璃 色 の 光 明 を 靈 視 す れ ば、
仏 魂 は 燦 燦 と 薬 王 院 大 本 堂 を
徘徊 す る な り ！

星野家三代句碑法楽会
四月二十三日(月)



四月二十三日、俳人の星野樗先生と御子息の高士先生(俳誌「玉藻」主宰)が来山され境内の天狗像脇にて「星野家三代句碑法楽会」が執り行われました。

この場所には、高浜虚子の次女である星野立子様と樗先生、高士先生の親子三代に渡り、俳句が刻まれた句碑がそれぞれ建立されております。

折り折りの記 (105) 波多野 重雄

猪の掘りし筍残滓かな

五月の雨が降り続いた後、高尾山の琵琶瀧路を登り、間もなく大菩薩峠の作者、中里介山の寓居跡に辿りつくと、繁る竹藪の中に猪の食い散らかした筍の跡が散乱している。

猪が掘った穴には、柔らかな筍の真白な残滓が目を引き、人の足音に驚いたのか食べ残しもある。筍は強い牙で掘ればひとたまりもない。掘られし土が、どこかここに盛り上がりつつある。

戦時中、八王子に疎開していた水原秋桜子の「雨ごもり筍飯を夜は炊けよ」を思い出す。鬱陶しい雨ごもりの夜の郷愁。

(高尾山健康登山の会々々長)

夫婦でいるはずなのに、ある天女(女性の天人)には男天がいまません。不思議に思い理由を尋ねると、その天女は「難陀という方が戒律を守った功德によって、この天に生まれ、私の夫となるはずなのです」と答えたのでした。それからというもの、難陀はこの天女を想い、妻のことは忘れて一途に戒律を守る生活を送りました。

しばらく経ってお釈迦様は「地獄を見に行こう」と仰ると、難陀を地獄へと連れて行きました。すると、とある地獄には釜も

あり獄卒もいるのに罪人がいません。その訳を聞くに獄卒は「難陀という僧が切利天で二千年の樂しみを得てからこの地獄に来るのだよ」と答えます。これを聞いて身の毛がよだち、今度は天女のことも忘れて、涅槃(本當の幸せ)のために戒律を守り、ついに悟りの境地(安心)を得たのでした。

(沙石集)

難陀の修行は、欲望を満たすためのものでした。行の功德によって天界に生まれはしますが、結局は地獄に墮ちる定め

となっていたのです。

雲の上の
樂しみとても
甲斐ぞなき
さてもやがて
住みし果てねば
(西行「山家集」)

(天界がどれほど楽しくても、そこには真の価値はない。天人も五衰して、永遠に住み続けることはできないのだから)天界に咲く草花も、春から夏へと移り変わっているでしょう。清々しい初夏の新緑に包まれながら、まだ見ぬ雲の上を思い馳せます。

(栃木北部教区普濟寺)



法の水釜 (71)

大正大学講師 高橋 秀城

紫藤の露の底に
残花の色
翠竹の煙の中に
暮鳥の声

(「和漢朗詠集」源相規)

(紫の藤が露のもとに散り残っている。翠の竹が霧の中に夕暮れの鶯の聲が聞こえて、春の名残を留めている)

先日まで梅や桜が咲き誇っていた庭にも、いつの間にか山吹色や藤紫など初夏の彩が増してきました。真つ青な空には白い雲が浮かんで、水を引き込んだ田の面にくっきりと映り込んでいます。田植えを済ませて一息つけば、どこからともなく聞こえてくる蛙の大合唱に季節の移ろいを感じます。

夏の夜は
まだ宵ながら
明けぬるを
雲のいづこに

「古今集」清原深養父(夏の夜は短くて、まだ宵の口と思つていたら、もう明けてしまった。沈む暇がなかった月は、雲のどの辺りに宿を借りるのだろう)

「短夜」と言われるように、これから夏に向かつて日一日と夜明けが早まっていきます。この歌では、夜を徹して時鳥の初音を待つていたのでしようか。気がつけば夜が明けて、空には共に過ぎた月が、雲の宿りを探し求めているようです。

ところで、見上げる空の彼方には、どのような世界があるのでしょうか。想像もつきませんが、きっと果てしなく広がっているに違いありません。前号では私たちが住むこの世(入界)を取り上げ

ましたが、今回は、その上の「天界」を仰ぎ見たいと思います。

仏教で「天」は、天界・天上界・天道などと呼ばれ、これまで見てきた六つの世界(六道)の中では六欲天として最上位に位置しています。人間界よりも遙かに清らかで、苦しみの少ない天界には、例えば兜率天に弥勒菩薩が、切利天に帝釈天が住んでいます。高尾山薬王院の山門に祀られる四天王も、帝釈天に仕えながら佛法を守護しています。天人の寿命は長く、人間の四百年を一日として四千年(地上の五億七千六百万年)とも言われ、万年千万年、さらには一劫にも及ぶそうです。ちなみに「劫」とは時間の単位で、一劫の長さとは、とても大きく大きな石に百年に一度天女が舞い降り、薄い羽衣で触れて、その石が磨り減つて無くなるほどの時間を喻えられます。人知をもつては計り知れない時の流れです。

このように、天界は全てにおいて人間界を超えた理想の世界です。天人は私たちに多くの幸せをもたらしてくれ、神のような存在ですが、そのような天人をもつてしても、いつかは人間と同じように命の終わりを迎えます。それは「天人の五衰」と呼ばれるもので、臨終が近づくと五つの衰えが現れると説かれています。それは、一、衣服が垢で汚れ、二、頭にかぶっている華の冠が萎れ、三、身体が臭くなり、四、腋の下から汗が流れ、五、自らの席(場所)を樂しまなくなる、という現象です。「五衰の睡」という言い回しがあるように、五衰の相が現れると、これまで天界で過ごしてきた極めて長い年月も、まるで一時の眠りのように感じられるそうです。



石楠花の花に初夏の訪れを感じる

す。長いようで短い……天人でさえそうなので、私たちが人間は言うに及ばずでしょうか。

天界をめぐることは、お釈迦様の弟子となった難陀の話が伝わっています。お釈迦様のお導きで出家をした難陀は、残してきた妻を忘れることができず、いつか寺から逃げ帰ろうと考えていました。その心を見透かしたお釈迦様は、方便(本當の教えに誘い入れるための仮の教え)を用います。「天上界が見たいか」と仰ると、衣の裾に取り付かせ、一緒に切利天に上られました。天界は全てが素晴らしい光景でした。ふと見ると、天人は皆